

評論「文化の窓：藤田喬平・ハービー・リトルトン二人展」
朝日ジャーナル，朝日新聞社，1989年8月11日号

エーベルトフト。日本では聞きなれない地名だ。コペンハーゲンから飛行機と車を使い続けば一時間で、対岸のスウェーデンやヨーロッパからのリゾート客であふれる、風光明媚なこの町へ到着する。

今この町のガラス美術館で「藤田喬平、ハービー・リトルトン二人展」が開かれている（9月17日まで）。

今年日本芸術院賞・恩賜賞を受けた藤田は、1949年に「スタジオグラス」と呼ばれる作家活動を始めた。「スタジオグラス」とは、それ以前の工場で作られる量産品に対し、個人が窯を持ったり工場を借りたりしながら、自己の造形を求めて制作する作家活動をいう。アメリカでその後リトルトンが同様の活動を開始。いわばこの二人は世界に何千といえるガラスに作家の先達というわけで、ドロドロとした熱いガラスに似た二人の制作欲から生まれる作品を、一目見ようという人々がこの町に押し寄せている。

藤田は内外を問わず評価の高い『飾管』とベネチアで制作した『カナナ（レース文様）の花瓶』を出品し、それらは北欧の柔らかな光線を浴びて一段と冴えを見せている。デンマーク国立工芸博物館のクリストハンセン氏は「日本の染織、漆などの伝統的な美と共通の精神世界を作品から受ける」と語るが、藤田は無意識の内に、そこに流れる日本人の感性をガラスの中に閉塞させ、王朝文化さながらに華麗に、典雅に作品を創っている。

一方、リトルトンの作品はオブジェが中心で、すべてクリスタルと色ガラスで構成、表現されている。『台状の形』『円錐の交差』『動きのある弧』など幾何学用語でタイトルをつけ、透明と色の対比の中での融合・分離を通して、自分と他との距離や接合を表わし、自己の思想を浄化した作品が多い。

この二人と同様のガラスの道を歩みながら、この美術館を創ったのがデンマークのフン・リュンゴーだ。1989年、彼は世界に散らばるガラス作家に手紙を書き送った。これに呼応して、続々と届いた作品の数々が、この美術館の二階に展覧されている。

30カ国200人の作家たちが独創的なガラスアートの可能性を追求しながら、共通の素材を通じて結束している。無限に膨張するガラスの持ち味そのままの空間が現出し、無償で出品したという作家や作品の精神的な広がりを見せつけていて、圧倒される。

リュンゴーに呼応したのは作家たちだけではなく。エーベルトフトの町は、元漁業組合の事務所を一軒彼に貸し与え、近隣の人々までがボランティアや美術館の会員となり労力奉仕や経済援助を申し出た。

数千年の歴史を持つガラスが工芸の域を脱し、アートとして確立した今日、表現の拡大とともに作家の試みが今後どのような発展をしていくのか興味深く見守っていきたい。